

ファリサイ派の人と徴税人のたとえ

ルカ 18 章 9-14 節

18:9 (そのとき) 自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対して (も)、イエスは次のたとえを話された。

18:10 「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。

18:11 ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。

18:12 わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』

18:13 ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』

18:14 言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

<祈り>

二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。

きょうのテキストは「二人の人が祈るために」と始まります。

まず 11 節でファリサイ派の人の「心の中」の祈りが語られ、13 節では徴税人の祈りが語られます。ただ 13 節では祈りとはいわず「言った」とだけあります。たとえ話 (イエスのつくり話) のことば尻を気にしすぎるのもどうかと思いますが、「祈り」についての教えをだけをイエスは言おうとしているのではないように思えます。

ファリサイ派の祈りをやりすぎ、いけすかないと感じる人もいるでしょう。その一方徴税人の祈りを、そうだ、そうだと同感する人、また逆にわざとらしいと感じる人、これもまたそれぞれだとおもいます。

だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる、

このように結論が 14 節で述べられ、徴税人の信仰が義とされます。

<ずるい祈り>

「神様、私は世間の多くの人々のように、神様の赦しなど必要としないと思っている高慢な者ではなく、またあのファリサイ派の人のように、良い行いをすることによって神様の、み前に出ることができると思っている者でもないことを感謝します。私はあの人たちとは違って、自分が神様の前に出る資格などなく、神様に赦していただかなければならない罪人であることを知っています」

ある牧師の説教の引用ですが、うまいこというなと思ったので引用しました。（*1）

「へりくだり」をこのように利用して祈るのは「ずる」でしょう。でもけっこうやりがちな事で強く自省しなければなりません。

<へりくだり>

結論では「高ぶり」「へりくだり」がポイントでした。では重要なポイントの「へりくだり」とはいったいどういうことか、イエスはたとえを引いて教えてくれたわけですが、へりくだりを折りこむ「祈り」をも考え出すわたしたちです。わたしたちに救いはあるのでしょうか。

<甘え>

ここで「甘え」という補助線を一本いれます。

信仰に甘えていればいいのか？

そうじゃないだろ、ちゃんと礼拝にいつて、奉仕・献金もして、あれやって、これやって云々…

いっている事は正論です。でも、たとえていうなら親に甘えてばかりの子どもに小言をいうオジサンの論理です。甘えることそのものを否定、甘えはダメということになれば、それは余計なお世話です。

親に甘える前に「甘えはいかん」と散々言われれば子どもは親に心を開きません。またよそのオジサンがいっているのならまだしも、決して親の言う言葉ではありません。イエスはいいます。

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

(マタイ福音書 11:28)

<悪から離れる>

子どもが悪い事をしないようにしようと思うのでも「親が悲しむから」と思うか「親に叱られるから」と思うかでは、行いは同じでも心はまったく違います。「親に叱られるから」と思っている子どもは、親が叱らないとなればやりたい放題になるでしょう。

親が悲しむ、悲しまない、これは子どもが親の立場で自分を見ている視線です。甘えの効用はこんなところに現れるのではないのでしょうか。イエスに思いっきり甘えることで、わたしたちがイエスを悲しませない自分を望むようになっていく。福音とはこのようなことをいうのではないのでしょうか。

徴税人は善人ではありません。悪いことばかりやってきているというのが当時の評判であり事実だったのでしょう。しかし、イエスは彼に「へりくだり」を見て義とされました。わたしたちはへりくだりを誇ることもしてしまうような救いのない者です。しかし「甘え」を信仰の中に自覚する、平たく言えばイエス・キリストに甘えることで、ずるい者ではなく、愛を知る者になっていければいいなあと思います。

(短い祈り) 自由に用いる

全能の神よ、きょう聞いたみことばを心に深く植え込み、み恵みによって行いの実を結び、み名の栄光をあらわすことができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

*1 2010年3月6日・日本キリスト教団横浜指路教会 主日礼拝説教より引用
http://www.yokohamashiloh.or.jp/reihai/message/shiloh_message110306mf.htm